

吉藏は一ヶ月の間に二度か三度訪ねて行つた。白石は眞鍮の火鉢でしよつちのう爐の炭をかき立てながらポツリ／＼ものを言つた。當時の社會主義者に廣く影響してゐたアナルコ・サンチカリズムは彼をも強く捉へてゐた。白石は經濟的總罷業を唯一の革命的手段と考へてゐた。その數年後の普選要求の勢力に依つて意識化して來た政治的鬭争といふことは、彼の頭にはまだ片鱗も現はれては居なかつた。が吉藏が勞働者の團結といふことの意義を具體的に知つたのは白石によつてであつた。

雪はやんでゐるがゾク／＼と寒かつた。吉藏は、五、六頁讀んだところで本を伏せて、裏へ出て行つた。雪をかぶつた炭俵をのぞいて見たが、屑炭も残つてゐなかつた。

『そだから、やるなつて言つたべせ』

かよはしよけて戻つて來た吉藏を見るとさう言つた。

半月ほど前、重太が氣の毒がつて自分で一俵擔いで來て呉れた。それを辛棒しながら使つてゐるが、昨日向ひの作太郎に十能で一掬ひ呉れてやつたのであつた。

『遅くもなつたし、行くのやめるがな』

かよは暗い顔をした。

昨夜、赤羽の爲の二の家から法事の迎ひが來た。足が疼き出してからは寢たきりで親戚や知合の誰彼とも會はずに居たので、かよは行きたいことは山々だつたが、また彼女は吉藏が會社を誣首られてブラ／＼してゐることにひどくひきめを感じてゐた。それを思ひ出したのだ。

が、末娘の今年七つになる玉枝は承知しなかつた。

『ううん、お母、お母行かねば俺一人でも行く』

玉枝は駄々をこねて、寢てゐるかよのからだにもたれかゝつて行つた。

娘に足を小突かれるか何かしてかよは苦しがつた。

『そうするなつてば、痛くて仕様がねえ』

吉藏は連れて行けば母の喜ぶのを知つてゐた。法事と言つても命がけの仕事をしてゐる鑛夫たちのそれは、酒をのんで唄つたり踊つたりして命の洗濯をするのであつた。時間も何時からと言ふことはない。晝に招かれて夜になつて來るものもある。酒があれば次の日も飲む。

『そんなこと言はねえで出掛けるべ』

吉藏が言ふと玉枝はトン／＼跳ね上つて喜んだ。失業して以來、勞働會のものが食ふものを續けて

呉れたが、三日も四日も米の飯を食はないことは度々だつた。朝も晝も晩も薩摩芋で間に合はせる日が續いた。ひどい窮乏は小さい玉枝にもすつかり作用してゐた。

吉藏は母のかよにボロくの毛布をかけて木綿帯で背負つて外に出た。

『お前、重たくて大變だべ』

かよは機嫌をなほした。

雪で重たい藁靴を引き摺つて玉枝は嬉しうにドン／＼先にかけて行つた。

五年程前、坑内で働いてゐたかよは落盤のとばつちりで足をやられてから働けなくなつた。それからといふもの跛足をひきながら歩いてゐた。この頃になつてそれが急に疼き出して部屋の中さへ歩けなくなつたのであつた。

吉藏は前屈みになつてドン／＼歩いて行つた。二人分の重みで、藁靴を穿いた足は雪の中に深く突きささつた。

『吉い、何處さ行くのだ』

誰彼はさう聲をかけて行つた。

事務所前で眞一郎の所謂訓話を聞かされて歸つた鑛夫たちのあるものは、自分の長屋に一枚の細片が投げ込まれてゐるのを見た。彼等が事務所前に集つてゐる間に、事務所の小使が郵便配達のやうに四十人からの臨時雇の馱首通知を大急ぎで配達して廻つたのであつた。

眞一郎は彼の話によつて鑛夫たちの不平を緩和した。即ち馱首者の一部は直ぐにでも復職の方法を講ずること、また会社がこの苦境を切り抜けると同時に直ちに全員の復職をはかることを約束した。がこれ等の馱首された臨時雇の大部分は、一旦常備を馱首して臨時雇に再編成した鑛夫だつた。従つてそれは永久的に馱首する計畫のもとに、眞一郎の執つた狡猾な漸次的手段に過ぎなかつたのだ。このことは直ぐに曝露された。第一回の馱首のときと違つて、今度はその後失業鑛夫たちがいくら求職を歎願しても、会社はてんで取り合はなかつた。石炭背負ひにも、泥溝浚ひにも、掃除夫にも傭つてやるとは言はなかつた。

鑛夫の不平不満は募つた。眞一郎の狡猾な搾取手段はあらゆる方面に頭を擡げた。特に掘坑夫の請負仕事に於てそれがひどかつた。半月目に伸取の現場員が廻つて歩いた。その度毎に坑夫たちはブツブツこぼさずには居られなかつた。掘坑夫の賃銀は半月は半月より低下して行つた。而も坑夫たちは

た、手取賃銀が少くなることに對して不平だつたが、それが如何なる手段と計算に依つて爲されるかを明確に知ることが出来なかつた。

常備の吉藏は無論、今度の鹹首に這入つて居なかつた。が彼はあの日の投石事件の犯人として鹹首された。

混乱のためにその場では誰が眞犯人であるか分らなかつたが、その日のうちに鑛夫たちにはそれが支柱夫の甚之助であることが分つた。

落盤の下敷になつた多七の屍體が闇の中から發見されたときに、早速坑内梯子を擔いで來たのは甚之助であつた。屍體はその坑内梯子にくゞりつけられて運び出された。彼は日頃富次とは親しい間柄でも、先づ死者がたゞ一人に過ぎず死亡手當の少いのを喜んで傍若無人に笑つたのを見た瞬間、甚之助の憤懣は絶頂に達したのであつた。彼はやつとのことで眞一郎をばり倒すのを我慢した。がそれ以後彼はいつか多七の仇をとつてやる決心をしてゐた。それがたうとうあの瞬間に爆發したのであつた。

會社には眞犯人が分らなかつた。それに反して最初に罵詈雑言を投げつけたのが吉藏であることはよく分つてゐた。眞一郎の負傷は輕かつた。眉の上下にかけて五分ばかり裂けただけで眼は助かつた。が彼の憤慨は並大抵ではなかつた。誰が眞犯人であるかは問題でなかつた。兎に角彼は吉藏をすぐに鹹首にした。

鹹首された鑛夫たちの一部分は家族を長屋に残して仕事をさがしに行つた。町に土方に出たり線路工夫にありつけたものは未だよかつた。雪が降りはじめると町の大きい店や地主や金貸は、家の周圍に足場のやうなものを造つてそれに葦を張つた。雪構と言つて吹雪を防ぐ用意であつた。あるものはこの雪構にやとられた。が冬になると仕事が無かつた。

この頃になつて渡り鑛夫が這入つて來た。それまで鑛山には外の鑛山でのやうに監督とか小頭といふものが居なかつた。渡りどもは小頭として不逞くされた面をして、彼方此方を押し廻つて歩いた。彼等は長屋々々から鹹首された鑛夫の家族たちを叩き出した。

出て行つた尻から長屋をたゞきつぶして修繕につかつたりストーヴに投げ込んだりした。女房たちは泣く／＼がらくた道具と子供を背負つて鑛山を去つて行つた。鑛山の出口のズツと向ふ

まで多勢のものが彼等を送つて行つた。四里も向ふの停車場まで荷物を背負つて送つて行くものもあつた。何處にも仕事を見出せないものは近郷の親戚をたよつて行つた。

吉藏は當分踏み止まる決心をした。ならずものどもが多勢やつて來ても、吉藏は司郎が製錬に出てることを楯にして頑として立退きに應じなかつた。お前等の十人や二十人はちつとも怖くはない、此方には全山の労働者が控へて居ると吉藏は言つた。

鑛山を出て行く氣なら何時でもさうする事が出來た。が折角出て來た芽を彼等の蹂躪にまかせるとは出來なかつた。「労働會」の仲間は強く彼をひきとめた。がそれよりも何よりも、彼をして全然此處を去る氣を起させないものは春江の存在に違ひなかつた。彼自身内心それを認めない譯には行かなかつた。春江は三日にあけず米、味噌を持つて來た。代用教員としての春江の薄給も一人前の坑夫の賃銀よりも遙かによかつた。吉藏の長屋にやつて來るときには春江は必ず何かブラ下けて來た。この援助は、「労働會」の仲間のなかでも特に目立つて來た。

春江の濫い援助は、吉藏をして如何なる困難をも堪へ忍んで行く悲愴な決心に驅り立てた。それは春江に對する熱情がさめた瞬間には消滅するかも知らなかつたが、兎に角、吉藏は活動を開始した。彼は「労働會」員の獲得に全努力を向けた。會員は次第に増加した。それが鬭争に耐へ得られる一定數に達したときに組合に再組織する日もさう遠くなかつた。

吉藏が赤羽の親戚の家を出たのは、四時には灯る冬の電燈がついて半時もしてからだつた。山路で暗くなると大變なので早く出た。

このあたりは山深いので夕方になると得て雨か雪か降り出した。外は大雪になつてゐた。半町先が見えなかつた。かよを背負つた吉藏は、頭を深く下けて山を下つた。

「お母、お前酒臭いな」
「さうか、あればッこ飲んでも臭いかなあ」

かよは背中と言つた。
彼等が行くとみんなもういゝ加減酒が廻つてゐて、婆さん連まで頬かむりをして甚句を唄つたり踊つたりした。かよは踊れないのを残念がつて少し飲んだ。

あとからあとから積る雪は人一人通るとその尻から綺麗に足跡を消した。一面の雪で路がまるで分らない。てんで路でないところに踏ん込んで腰までうまつたりした。

妹の玉枝は大福のやうに雪にまみれて、それでも一心に吉藏のつけた足跡をついて来た。濡れ氣味に柔らかい雪が、藁靴の裏へへばりついて、それが段々鍋の尻のやうに盛り上つて来た。さうなると安定が悪くなつて大人でも轉ばずに歩くことは容易でなかつた。

玉枝は三度も四度もツンのめつた。彼女は町の子供のやうには泣かなかつた。起き上るとすぐ忘れて、ドン／＼遅れを取り返さうとして駈け出した。そしてまた轉んだ。

終ひに兄たちから半町も遅れると玉枝は轉んだなりでワーツと泣き出した。

『泣かないで来い、来い』

かよは吉藏の背中中で首をうしろに捻ぢ向けて叫んだ。

が起き上らなかつた。

吉藏は戻つて行つて抱き起した。餘り泣いたので、顔に食ツついた雪が涙で解けた。

片手に膳のものを入れた重箱を下けた吉藏は、もう一方の腕に玉枝を抱いた。

四、五町山路を降りると平地になつた。川添ひに下るとその先は共樂館や日用品販賣所のある町端れだつた。

『あと歩け、家さ行けばこれやるから』

玉枝を下に置いて吉藏は片手の重箱を振つて見せた。

が玉枝はまた泣き出した。なだめると反對に火がついたやうに哮えた。次々とも事が意に反すると大人でもつむじを曲げたくなる。吉藏は考へてまた抱き上げた。

共樂館のうしろへ出ると、向ふから春江がやつて来るのが見えた。雪の幕で見えたりかくれたりするがそれはたしかに春江だつた。

『お前、何處さ行つて来た』

春江は人なつかしい眼をかゞやかせて近づいた。

『大變だよ、あの渡りのごろつきが来て、お前の家みんなぶツこわして行つたよ』

春江はさう言つてマントの雪をボン／＼中から指で弾いて落した。

『なに、ぶツこわしたつて』

吉藏よりも先に背中のかよが大きな聲で唸つた。

それは一時間ばかり前の出来事であつた。長屋の中に誰も居ないのを見届けての上の仕事をしかつ

た。彼等ならずものどもは、大シヤベルや刃廣などを持つて来て忽ちのうちに吉藏の長屋を滅苦々々に叩き潰して行つた。暴れものゝ兩重が坑内に出てゐたことはせめてもの幸であつた。若し重吉でも重太でもそれと知つたらどんなことが持ち上つたか？ 芳太郎や信一が駈けつけたが何うにも手のつけやうがなかつた。近所の長屋から鑛夫や女房たちが多勢その附近に群つてブツ／＼立つたが、餘りの狂氣ひ沙汰にたゞ見てゐるばかりであつた。

「お前とこ鑛山から追ひ出すつもりでやつた仕事だすべ、きつと……」
 春江は苦々しげに言つた。

長屋の女房たちが四、五人一かたまりになつて潰された長屋の前に立つてゐるのが見えた。

その中には、今製錬から戻つて來たらしい司郎が、片手に辨當箱をブラ下げた恰好でほんやり立つてゐた。司郎はまるで自分の家の火事跡にやつて來た人間のやうに、ボカーンとして吉藏の姿を認めても表情一つ動かさなかつた。

煙突の破片で負傷した司郎の頭には二錢銅貨大の禿が出来てゐた。それはいゝが、腦にひゞいたらしく、あの生々した子供が、それ以來何處か抜けたやうな様子になつて了つてゐた。

吉藏の眼には泪が湧いて來た。毀れた家よりも、さういふ司郎の様子の方が吉藏には何倍も悲しかつた。

「畜生やつたな、野郎」

障子は鼻紙のやうにクシャ／＼になつてゐた。疊は何處かへ運び去られてゐた。むき出された床板に、鍋、鐵瓶、釜、そんなものが轉けてゐる。それはまるで洪水に洗ひ流された家のやうであつた。

背中がかよが奇妙な聲で泣いた。

「こんなことになつて、皆お前が會社さ楯突くからだべせ……」

平常は何も言はず、寧ろ吉藏のやることに無言のうちに同意してゐるかよは、ときたまそんな言ひかたで泣いた。母に泣かれると吉藏は一番參つた。

がこの時も吉藏は凝とその苦痛を噛み殺した。

十六

春江は米袋を下けて購買から出て來た。

外に立つて待つてゐた吉藏が春江には荷が勝ち過ぎるとッしりと重い米袋を小腋に抱へた。二人は歩き出した。

口實がないと具合が悪かつたのでそんな用事をつくつて出て来たのであつた。

雪がやんで風の死んだ夜だつた。空気はヒリ／＼と面の皮が剥けるほど凍つてゐた。

人の往來のある購買の前通りは雪が象牙のやうに固く、春江の日和下駄の下でキュツ／＼と氣持ちよく鳴つた。

一人の子供がビヨコンと春江に御辭儀して行つた。

「いやだな、人が見てゐて」

春江は小聲で人眼をきらつた。

二人の足は期せずして大直利橋を渡つて人家のない川向ふに出た。

川は雪にうまつて、真中頃がチヨロ／＼した細い流れになつて居るきりだつた。川向ふから流れて来る光りでそれがチラ／＼輝いてゐる外は、墨を流したやうな暗さであつた。

闇の中に二人の吐き出す息が白い棒のやうに凍つた。

町筋と違つて河原は寒かつた。

吉藏は別段それほど寒いとは思はなかつた。二人の手がとき／＼觸れ合つた。吉藏は思ひ切つて春江の手を握つた。それは彼が豫想してゐたよりも大きいコツ／＼した手であつた。がそれは何時までも彼の掌の中で凝としてゐた。

二人は黙つて歩いて行つた。

「俺學校やめやうと思ふども……」

春江が突然言つた。

「何してやめるつて」

いよく豫想してゐたことが来たなと思つた。春江がいろ／＼運動の結果代用教員になつてから半年近くなつた。その間、春江は吉藏たちのグループと始終往復してゐた。いや、吉藏とは別な意味で寧ろその中心人物を爲してゐた。「労働會」にもチヨイ／＼顔を出してゐた。言はゞ會社の教育機關である學校當局がそれを全然知らない筈はなかつた。がこれまで學校では全然知らぬ顔をしてゐた。遅かれ早かれそれは来るのだ。春江自身も考へてゐた。

今朝、登校して、教員室に這入つて行くと春江はひどく驚いた。自分のテーブルが何處かへ片付けてあつた。いよ／＼來たと思つた。が春江はテーブルなしで一日の授業を終つた。

『困つたことになつたな』

吉藏はやつとそれだけ吐き出した。暗い気持ちちが吉藏を捉へた。自分の責任といふことも考へさせられた。

吉藏の一家が春江の家に轉々三日になつた。彼女の家は鑛山町から少し出はづれたところにあつた。長い間、坑夫の職頭をしてゐる間に、春江の父は味噌を嘗めながらちよつびり貯めた金で掘立小屋のやうな家をたてた。そして子供の玩具や駄菓子のお店を出した。が間もなく父は死んでしまつたのでそれだけでは暮らしが立たなくなつた。上京して紡績會社に居る間、春江は給金の大部分を母親に送り續けてゐた。春江には母と妹が二人居た。その中に一家で割り込むといふことは無理な話であつた。春江の母は吉藏を好いてゐたが、いゝ気持ちでないことは吉藏にも分つてゐた。何とかして春江の家を出なければと思つてゐた矢先であつた。

其處へ持つて來て春江が安い給料からも離れるとすれば一體何うなるのか？ 學校當局は決定的な

口實を握むまで春江を追ひ出すことを躊躇してゐたのだ。そしてそれはもう來た。

お互ひに何を言つていいか分らなかつた。二人は首垂れたまゝ歩いてゐた。

『俺、縣下さ出れば知つてゐる人居るから勤めるにいいどもな』

突然顔を上げた春江は溜息のやうに吐き出した。川向ふから流れて來る光りで彼女の眼鏡がチラチラと光つた。

縣下といふのは、此處から二十里ほど離れた日本海岸のA市のことだつた。さう言はれた瞬間、吉藏は彼女がもうA市に去つて了つたやうな淋しさを感じた。

『それはさうだべな』

吉藏は氣乗りしない返事をした。

『うん、縣下さ行けばね』と春江は吉藏が同意を示したやうに解した調子で續けた。『女學校のときの先生方も知つてゐるし、その頃下宿してゐた家の隣りに居る縣視學も覚えてゐるから、學校の先生になる氣ならいくらでもなれると思ふども』

彼女のかうした女らしい氣持ちは吉藏には意外だつた。鑛山に歸つて來てからの彼女はついそんな

弱い氣持ちを見せたことがなかつた。寧ろ春江によつて自分の逃避的な氣持ちをひきしめて來たのであつた。

が吉藏はそれを女らしい氣持ちとのみは笑へなかつた。彼女は母親や妹たちを養つて行かなければならないのだ。その瞬間、吉藏の氣持ちは急に變つた。

飢餓——失業以來割に平氣で耐へ忍んで來たそれが、突然強く彼の胸を押し潰して來た。それは春江にも自分にも攻めかゝつて來てゐるのだ。鑛山では今後絶対に就業の見込みがなかつた。仲間も飢ゑに迫つて居る。「勞働會」の連中の自分等一家に對する物質的援助も何時まで續くか分らなかつた。仲間が持つて來て呉れる一俵の炭、百目の味噌もそれを受けるとることはひどく氣がひけた。

「俺だつて行つたら何か仕事あるかも知れないな」

吉藏は我れ知らず言つた。その瞬間、この頃一寸も彼の頭から離れたことのない鑛山の全鑛夫に對する關心は彼の頭から消えてゐた。あるものは春江だけだつた。

「いくらもあるすべ。俺も行つたら必ずさがして上げるし」

急に春江は元氣づいた。

「さうだ、忘れてゐた、縣下の鈴木から此間、電機商會で人をさがして居るから來ないかつて手紙來てあつた」

さう言つた瞬間、吉藏は失業以來の極端に缺乏した生活から救ひ出されたやうな氣持ちになつた。

春江の家に戻つて來ると、狭い土間には一杯に下駄や藁靴が脱ぎすてゝあつた。元氣な話し聲も知れて來た。

仲間が七、八人集つてゐた。春江は二人だけで歩いて來たことが氣がひけたらしく、その様子を知るところこそ裏口から廻つて、水屋で米をあけてゐた。

みんな話をやめて吉藏の方を見た。

「何處さ行つて來た、餘り春江ちやと夜遊びすればお母がたに怒られるで、な、そでねえがお母」
信一は部屋の隅で棚をあけて誰かの足袋をさがしてゐる春江の母の方に首を捻ぢ向けて言つた。

母は此方に背中を向けたまゝ答へた。

「そんなことお前方心配しなくてもいい」

みんな氣持ちのいい大聲で笑つた。

眞中にねツちりと大胡坐をかいてゐる重吉は白い繻帶で左の腕を釣つてゐた。

『重吉、お前何したのか』

吉藏はひやかしには答へずに重吉の方を向いた。

『ごろつきがたとやり合つたとよ』

後藤がひきとつて言つた。

重吉が百目石の利三郎のところに「勞働會」加入の勧誘に行つた歸り路、購買に寄つたのは夕方であつた。

霰が降り始める時分から購買の品物はまた切れて來た。鑛夫や女房たちは毎日のやうに帳面をブラ下けて購買の前に集つた。僅かな品物はそれが到着すると直ぐ羽根が生へて飛んで行つて了ふので、彼等はさうして永いこと品物の來るのを待つてゐた。大直利に當つた當座の景氣はとうに何處かへ行つて了つた。去年の末頃の狀態が再び來てゐた。

米か、醬油か、それとも炭かが來たのだ。みんな入口の前に列をつくつてゐる。重吉は大急ぎで

け出して列に加はつた。

突然重吉の前に誰かが物をも言はず割り込んで來た。それは威張り腐つた卑しい顔をして彼方此方押し廻つて歩く小頭の一人だつた。懲性もなく監獄部屋から監獄部屋を渡り歩いたやうな、ルンペン根生の骨の隨までしみ込んださうい眼をした野郎であつた。

『この野郎、うしろさ行け』

重吉はそいつを丸太でも投げ飛ばすやうに無造作にフツ飛ばした。

『やつたな、ドン百姓の芋掘りめ』

そいつは起き上ると怒つた猿のやうな目つきをして向つて來た。

『お前みたいなもの、なんほ來たつておツかなくねえぞ』

重吉はふところからタガネを出して握つた。「勞働會」加入の勧誘に廻るとき、彼は何時でもそれをふところにしてゐた。その尖端を一寸懐からのぞかせることに依つて、無言のうちに自分の決意のかたきを相手に示す積りであつた。

相手は急に尻込みした。しつほを卷いた犬のやうに離れたところでガミ／＼哮えた。が次の瞬間重

吉は其處にその野郎の同類が七、八人やつて來たのを見た。彼奴等は利三郎の長屋から重吉のあとをつけて來てゐたのだ。そしてこの魚の骨みたいな野郎ををとりにつかつて、喧嘩好きな重吉を奸計に乗せやうとかゝつたのだ。

が重吉にはそれが氣がつく餘裕がなかつた。前後不覺な狂暴さがギラ／＼と彼の眼に輝いた。

向ふは手に／＼三尺もある櫂の棒を持つてゐた。こんな場合タガネは重寶な道具ではなかつた。重吉は直きにタガネをたゞき落されて敵の打撃を浴びた。

始めのうちこそ、鑛夫や女房たちは小頭どもの不當を鳴らしてガヤ／＼言つたが、さうなると黙つて了つた。彼等は就業してゐても味噌も満足には嘗められなかつた。がさうなればなるほど、彼等は蟲を殺して自分だけの就業者としての地位を維持しやうとあせつた。

重吉の左腕が赤く血で染つた。重吉は走り出した。人々は逃げ出したのだと思つた。が重吉は購買の軒に立てかけてある屋根梯子を持つて戻つて來た。群集はパツと飛沫のやうに四方に散つた。屋根梯子は重吉の頭の上でブーンと虻のやうに唸り聲をあけながら、風車のやうに廻轉した。人々は親譲りの糞力にあつけにとられた。

『負ける譯ないと思つたら、やつぱりな』

若いものはさう感歎した。

もうごろつきどもは其處に居なかつた。

『可笑しくねえか、あの爲の野郎、俺購買から歸るべと思つたらやつて來やがつて、今度集りのあるとき知らせて呉れツて言やがるんだよ』

重吉は笑ひもせずと言つた。

爲五郎は重吉たちよりも一まはり年のいつた坑夫であつた。勝氣な爲五郎は重吉とも氣が合つてゐたから文句なしにグループへ這入るだらうと思つてゐたが、中々うんとは言はなかつた。理窟ぬきの鑛夫たちは、自分等の力を實際に見なければ中々その氣にはなれなかつた。

『爲の野郎、喧嘩でもする氣でねえか』

『手間のかゝる奴だな』

みんな笑つた。

春江は子供が菓子を買つたときのやうに喜んだ。

『そだども、正直でいゝな』

みんな元氣に話した。不況が襲つて來てからの鑛山の卑屈な死んだやうな空氣は此處には無かつた。眞一郎のこと、けちな解雇手當のこと、役員の誰彼のこと——みんな何でも彼でもぶちまけた。

『吉藏、俺今日旭さ行つて障子引ッ張つて來たや』

清作が突然言つた。

『障子、何するなが？』

吉藏は何のことか分らなかつた。

『何するツて、お前の長屋修繕すのにきまつて居るべせ』

清作たちは四、五人で吉藏の破壊された長屋を修繕することを相談した。彼には鑛山から二里近く離れた旭村に二町歩ばかりの田を持つてゐる親戚があつた。清作は早速、以前養蠶につかつた一棟の不用な障子を貰つて荷車へつけて來た。

『あんたら長屋、みんなしてやればわけないや』

後藤はからだを乗り出した。

が吉藏には全然初耳だつた。

『それは有難いどもな、お前方さばかり心配かけてすまねえし、俺自分で何とかしやうかと思つてゐるから、先づ心配しないでくれよ』

皆黙つた。が清作は喧嘩口調で唸つた。

『濟まねえもすむもあるてか、俺方勝手にやるなだからお前黙つて居れ、それでもいけねえと言ふならお前とこ鑛山から追ひ出すぞ』

笑ひ聲がハツバのやうに爆發した。吉藏もつられて笑つた。

『いゝか、あのごろつきどもきつと邪魔しに來るにきまつてゐるから、労働會のもの皆してやることにしたらどうだ』

貞三が提議した。

『そだ、皆してやればあんたら長屋二、三時間もあればバタ／＼と出來てしまふべ』

後藤が賛成した。

『何あんたら野郎どもなんほ來たつて』縋帶で片手を釣つた重吉は他の一方の腕を上げて見せて續け



た。『片ツ方の手で片づけて見せるから心配するなよ、早くやらねば、あいつらぶツこはして薪にでもしてしまへばいけねえから、早速明日でもやることにしたらよかべ』

みんなもう半分その仕事を始めたやうな調子であつた。

吉藏は先刻春江と話合つたことを思ひ出した。がそれはもう一年も前の氣持ちであつたやうな氣がした。吉藏は自分を支持する力が、いや闘争意識が、すくなくともこのグループだけにはメキメキと力強く頭を擡げて來たのを感じた。ちつほけな個人的な氣持ちに入換つて、廣い階級連帶心が強く彼を擡んだ。

『お前方やつて呉れるなら任せる、無論俺も働くよ』

十七

労働不安がやつて來た。

會社は先月から賃銀支拂を停止した。購買の物品缺乏は極度に達した。誰も彼も購買の前に半日立ち通して待つた揚句の果には空手で戻つた。米の支給だけは何うにか間に合はせてゐたのがそれも切

れて來た。近在の村に知合や親戚をもつてゐる鑛夫たちは米を貰ひに行つた。

購買の前は不平の聲で滿された。

嗚鳴つたり叫んだりするものがあつた。

その不平は何時爆發するかも知らない形勢だつた。

人相の想い小頭どもがその邊をうろくしてゐた。彼等は無言のうちに鑛夫たちの不満を壓へやうとしてゐた。

學校では一日は愚か二日も米の飯を食はない子供たちが何人も居た。そのうちの二、三人は授業中に卒倒した。

鑛夫たちは腹の皮が背中にひつつく思ひをしながらも仕事に出て行つた。

女房たちは鑛山町に一軒しかない質屋ののれんを潜りはじめた。仕事道具とか鍋、釜を持ち込んで二、三十錢の金を握つた。が質屋ののれんを潜ることの出来るのは幾らか暮らしの増しな鑛夫に限つた。質草がなかつた。質屋に行つた女房たちは意外な思ひをした。其處に來てゐるのは大部分役員たちの妻君であつた。彼女等の質草はよかつた。裾をほかした紋付羽織とか、丸帯とか……。

『なんとまあ、いゝものだ』

鑛夫の女房たちは自分等の現實も忘れて、それ等の質草に一寸手を觸れて見て感歎した。親類から米を貰つて來た鑛夫は、そいつを少し役員に賣つた小金で刻み貰を買つた。

あるものは會社の倉庫から炭を一俵持ち出したお蔭で、以前の犯人も同一人に違ひないと睨まれて駐在巡查に突き出された。枕木を盗んだ犯人は檢舉らなかつた。

飢餓のための負傷者が頻發した。一少年は背負籠を背負つたまゝ坑内梯子から落ちて怪我した。他の女の手古は、やきはかりでマスの口に鑛石を投げ込む瞬間にその中に墜落して三日も出て來なかつた。

酒だけが時々支給された。會社は酒屋だけには信用があるのだと言つた。が誰も會社の奸計に氣がつくものは無かつた。鑛夫たちは酒が來たといふと、まるで規定の賃銀を貰つた労働者が餘分の振舞酒でも出された氣持ちで喜んだ。そして會社に向つて不平を爆發させることを忘れて仲間にならなかつた。

彼等は酒を飲んで喧嘩した。時には血まみれ騒ぎまでやつた。

主任達が續々山を去るとか、大整理があるとか、採鑛以外の一切の事業が廢止されるとか、廢山になるとか——これ等の噂は、空ッ腹で眩暈を起しながら仕事を續けてゐる鑛夫たちを益々萎縮させることに役立つた。

また彼等の憤懣を内に向け、その拳固を嬖や仲間に向つて振り上げる作用を營んだ。

仕事を休んで日雇や人夫として出稼ぎするものがあつた。かうなると過般の馘首で仕事を奪はれて出稼ぎしてゐる連中がうらやましくなつた。始めて出稼ぎといふ味をしめた彼等は、何處へ行つても搾取と壓迫が待ち構へてゐるのだといふことには氣がつかなかつた。

更に不幸な事件が持ち上つた。

谷間深い鑛山町は、風向き次第で製鍊の煤煙がうまく外れたときでも、午間の一寸の間しか日の光りがさゝなかつた。而も冬の間は滅多に太陽の顔を拜むことが出來なかつた。

珍らしく晴れた風のない午後であつた。

深く雲を被つた北側の山の頂きだけ強く日に輝いてゐた。

枯れた木に鳥が來て羽搏いた。

五、六百尺もある絶壁と言ひたいやうな急勾配のふもとには撰鑛場がうづくまつてゐた。枝から振り落された一掴みの雪は、砂崩れのやうに先を争つてボロ／＼零れて行つたが、そのうちの一つは段々大きくなつた。

雪は日光に照らされて濡れてゐた。雪塊はコクリ／＼と部厚い雪を剥ぎ起して自分のからだに食つけては資本家のやうに肥つた。

それが通つた跡には地肌があらはれて黒い縞が出来てゐるのが見えた。

それは見る／＼大きくなり、速度を加へて、やがて二、三十坪もある積雪をゴ／＼といふ凄いと一緒に押し流した。

雪の洪水——それは怒濤のやうな飛沫をあけて暴進した。

その邊を歩いてゐたものは、白い洪水がゴ／＼といふ物凄いな音響と一緒に襲ひかゝり忽ちその咆哮の中に撰鑛場を一呑みにして了ふのを見た。

忽ち撰鑛場の前は黒山の人になつた。

鑛夫たちはシャベルを擔いでかけつけた。彼等はワツシヨ／＼といふかけ聲と一緒に雪を掬つ

ては投じた。ほんやり立つてゐるものはその投じた雪を頭からかぶつた。青年團と、五年に一度位しか仕事のない消防組がかけつけた。各坑口から蟻のやうに坑夫たちが這ひ出して來た。其處は戦場だつた。

人々は眼の前の雪の山のなかに建物がペシャンコになつてゐるのを見た。油選場の一部もつぶれて、雪の中から裂けた木口が折れた手のやうに突ン出てゐた。崩雪は撰鑛場をつぶした餘勢で、その前の空地をも堆い雪でうづめてゐた。

數十本の腕が間断なく動いて雪は見る／＼掻き退けられて行つた。

が道具がないために手を拱いて見てゐるより仕方のない鑛夫達や女や子供は、みんな息を殺してジリジリしてゐた。彼等には必死の救助作業が十年もかゝる氣永な工事のやうにしか思はれなかつた。念佛のやうに自分の娘の名を呼んでゐる女房が居た。氣狂ひのやうに矢張り娘を呼びながら其邊を往つたり來つたりしてゐる年とつた鑛夫が居た。ほんやりゐんだまゝ、オイ／＼泣いてゐる少女が居た。しかし誰も人が泣いたり喚いたりしてゐることに氣がつかなかつた。

が油選場の方の騒ぎはそれ以上だつた。つぶれた瞬間、働いてゐた娘たちの逃げ路は其處だけしか

なかつた。數人の娘が血に染つた恰好で出て來た。が他の娘たちの消息は知れなかつた。もう誰一人出て來ないことが分つても、油選場一杯に群つた人々は眼を皿にして待つてゐた。

肩のがツちりした鑛夫たちは、破壊されて柱や破目の滅茶々に交錯した部分を、ドシ／＼兩鶴でぶっこはしながら内部へ進んで行つた。しかし間もなく後等は退却を餘儀なくされた。濛々たる煙が吹き出して來た。火がついたのだ。

建物の一部が雪の中から出てゐる箇所が早く進んだ。救出口がつくと、その邊は叫び、我鳴り、呻めきによつて満された。鑛夫たちは我れ先に雪の中に潜つて行つた。

最初の一人が救ひ出された。

群衆はその一人に殺倒した。悲しみと恐怖にみたされた顔がその周圍に集つた。それが自分の肉身でないのを知ると、數人の女の泣聲は一聲耐え難いものになつた。

それは雪にまみれた四十がらみの女で、死んでゐるか生きてゐるか分らなかつた。彼女の息子らしい少年が背中へ乗せて雪の中をかけて行つた。

娘たちは次から次と救ひ出された。

何時の間にか戸板が何枚も用意されてあつた。しやんとして自分一人で歩いて行く娘もあつた。が大部分は戸板にのせられて、數人の鑛夫たちに依つて病院か自分の長屋かに運ばれて行つた。

雪の中から濛々と煙が出て來た。パチ／＼と勢ひのいゝ音がして雪の中で建物か燃えはじめた。メラ／＼といふ火が油選場の方にもものびて行つた。

『おい、火事だ、火事だ』

役員たちは其方の方にかたまつて行つた。焼けないうちにぶち毀してしまふに限る。火を食ひとめやうとして、シャベルや兩鶴が滅茶苦茶に羽目や柱に振り降ろされた。

運び出された屍體の周圍には人が黒山のやうにたかつて、その中からは無残な泣聲や喚めき聲が響いて來た。

『腕が一本何處へ行つたかなあ』

さう言つてまた雪の中に潜つて行く男が居た。

まだ全部救ひ出されては居なかつた。その妹や母たちはブル／＼膝頭をふるはせてゐた。一人の男は火の燃えてゐる油選場の方へ狂つたやうに駈けて行つた。

『まだ出て来ないものが居るべせ。火事も糞もあるかい、畜生、梅毒患者の癩病の性！』
風がまるで無かつた。コールドターのやうに黒い煙が山のふもとから棒のやうに眞ッ直に立ちのぼつてゐるのが遠くから見えた。

が間もなく物凄い爆音が起つた。何處の長屋の障子もヒリ／＼とふるへた。そして煙突のやうな煙は消えてしまつた。

役員どもは生死不明の數人は死んだものときめてしまつた。そこで燃えひろがりを防ぐために、火のついた建物をマイトでヤツつけたのであつた。

十八

「労働會」が會社に向つて解雇手當の全額支拂、死亡者手當即時支拂の要求を出して一週間たつたが會社からは何の回答も得られなかつた。それは餘りに一小部分の要求であつたが、若し大きな要求で行けば會社は廢山することも辭せない形勢だつた。「労働會」は全鑛夫の屋外大會を決行する手筈をきめた。吉藏たちはこの大會を直ちに罷工大會に變更する計畫だつた。明後日には大會が開かれると

いふ日の午後であつた。何處からか雇はれて来た數人の土方が製鍊所の附近で仕事をはじめた。夕方にはその周圍には鐵條網が張りめぐらされてゐた。

魚籠を背負つた老人の菊松は、長屋を軒並みに聲をかけて行つた。

もう一時間近くも歩いてゐたが、籠の中の錢箱代用の古ほけた五合枴には、數枚の白銅と銅貨が轉がつて居るだけだつた。

この頃は魚など買つて食へる鑛夫は居なかつた。が、倅の重太の働きだけでは五人の家族を養つて行くことは出来なかつた。彼は水涕を垂らしながら、吹雪の中を花岡町から魚を擔いで來ては、鑛夫長屋を廻つて歩いた。

口の悪いことで通つてゐる菊松にとつて子供のある女は皆婆に違ひなかつた。

『婆居たかな』

『なんだ婆だなんて、これでも俺まだ若い積りだよ』

『何だつて婆、お前みたいなものなんほ紅かねつけたつて誰も寄りつくもの居ねえべ』

こんなことを言ひながら菊松は上り框に籠を降ろすのであつた。

が今日に限つてそんな冗談口を叩く元氣がなかつた。何にも賣らなくてもいゝから一刻も早く自分の巢へ戻りたくてたまらなかつた。水沸が鼻の下で凍つてゐた。両方の掌は正月を過ぎた鏡餅のやうに深くひび割れがしてゐた。踵が殊にひどくズキ／＼痛んで足がすくむ氣がした。

製鍊夫の子之吉の長屋に來た。

菊松の聲は元氣がなかつた。

『子之吉の嬢居たか』

『目腐れ親爺が』

鑛山では目の悪いものが澤山居た。殊に菊松の眼はたちが悪く、眼の縁が創口のやうに赤くただれてゐた。そこで女房たちは皆彼のことをさう言つた。

それが何時になく癩に觸つた。

『何だよ、目腐れなんて、したらお前は何だつてか』

『目腐れだから目腐れて言ふべせ』

『何でもいゝ、魚いるかいらねいか』

『この不景氣に、味噌も食はれないと言ふに、魚など買ふものあるてか』

『そんなこと言はないですよ、お前女振りいゝから負けてやる、何か買つてけれ』

『この前の鹽引など食はれなかつたよ、辛くてな』

『うん、今日のは違ふで、濱から舟で來たんだがらな』

『そだら何か貰ふが、そのかわり錢こは明日だや、米こでも賣らねば錢こは一錢もないからな』

菊松は黙つて五、六匹の鹽漬の神魚と二束の目刺を籠の中から掴み出した。それからふところから手垢や魚の鱗で汚なくよごれたヨレ／＼の帖面を出した。悪い西洋半紙を袋にして綴り合はした帖面で、三寸ほどに減つた黄色い鉛筆を風絲でブラ下けてあつた。

菊松は帖面を赤くただれた眼の先に持つて行つた。帖面と眼との間隔は三寸ほどしかなかつた。そして菊松は斜めに帖面を睨みながら、鉛筆の心を管め／＼書きはじめた。

神魚の方は、瓢箪のやうな魚の輪廊の中に眼玉を書いた。それを五つ六つ書いた。目刺の方は横の線を三、四本引ッ張つて一本縦の棒を通した。この帖面には文字が一字も書いてなかつた。得意先は

頭で覚えてゐた。

書き上げるに長いことかゝつた。

「そだらまた買つて呉れよ」

菊松は籠を背負つて歩き出した。

「お母、居たが」

「目腐れ親爺が……今日入用え」

「そんなこと言はねで買つて呉れ、俺寒くて死んどこだよ」

菊松は片手をあけて鼻の下で凍つてゐる涕水を拭つた。

「入用えつたら、ただで置いて行くごつたば何ほでも貫つてやらせ」

「ただ置いて行く位ならば誰雪の中こんたことして歩くもんだてか」

菊松はブン／＼して軒を離れた。

外は吹雪になつてゐた。

其邊から鑛山の入口になつてゐる門衛のゐるところまでは人家がすくなかつた。

烈しい吹雪をからだで押し分けるやうにして菊松は前のめりに進んで行つた。

門衛の小屋の前を過ぎてトロツコ路づたひに暫らく行くと、小店商ひだとか、日雇だとか、作男だ

とか、鑛山労働以外の依食者の一かたまりの人家があつた。鑛夫たちは彼等を不景氣知らずだと羨ん

でゐた。菊松は其處へ行けば少しは捌けさうに思つた。

サアツと鼻ツ先も見えない吹雪が襲つて来た。忽ち菊松の姿は見えなくなつてしまつた。烈しい吹

雪の一撃で、コロリと子供のやうに他愛なく雪の中に轉けた。菊松は鼻をクス／＼やりながらヤツこ

らさと起き上つた。

「親爺、何處さ行く」

門衛の硝子戸の中から巡視の蛇川が呼んだ。

菊松は手を焙らうと思つて中に這入つて行つた。

「お前、馬鹿者でねえが……魚など買ふものあるてか」

クワツ／＼と炭火のもえた大きな石火鉢に股をひろけた蛇川は吐き出した。彼のうしろには机の足

に繋がれた土佐犬のジョンが太い息を吐き出してゐた。

「そだつて、幾許でも稼がねば、俺土左衛門の眞似でもするより外ないべせ」
菊松はからだの雪を拂ひのけて魚籠を背負つたまゝ、兩手を炭火の上にかざした。

「そだく、お前など早く六兵衛の眞似した方がいい、かも知れねえよ」

六兵衛は矢張り菊松などと同時に坑内の仕事を奪はれてから泥溝浚などをしてゐるが、この秋のあ
る朝、鑛水濾過池に浮き上つてゐるのを發見された。

「寒くて俺死んどこだよ」

間もなく菊松は外に出た。

「おい、目腐れ親爺」

虻川が呼び返した。

「お前などこの世の場塞ぎだから、早く斃死つた方がいいよぞ、お前ばかりでねえ、お前方みんなよ」

こんなことを執拗く言ふ虻川が分らなかつた。普段は虻川の方かう挨拶するほどだつたのだ。それ
だけに菊松は癪にさわつた。

硝子戸の隙間から顔だけ突き入れて菊松は唸つた。

「何だと電燈頭、貴様など世話しねても死ぬ時來れば死ぬのだ、貴様こそ早く斃死ればいゝねが……」
若いものがたみんな言つてるの知らねが、貴様とこ追ひ出した方がいいッてよ……」

その瞬間だつた。菊松は兩方の眼玉から火が出たと思つた。虻川が投げた焼火箸が額に當つたの
だ。

菊松は夢中で吹雪の中を走つた。

背中でガタゴト魚籠が大きく左右に遙れた。あぶない足つきだつた。

何度も轉んだ。

跳ね起きてはまた夢中で駆け出した。それはまるで早く飯を食ひたさに大急ぎで走つて行く小學校
の子供そっくりだつた。

百目石の長屋町に這入ると菊松は叫んだ。

「虻川の電燈頭、俺さ火箸ぶツつけたや」

長屋から二人、三人出て來た。

彼等は菊松の眉間からドス黒い血が流れてゐるのを見た。

「何したてよ、電燈頭？」

菊松は路の兩側に高く掻き上げた雪の上に魚籠を降ろした。

「言ふことに事缺いて、飯食はれながつたらお前方みんなくたばつてしまへよ』
甚蔵は顔色を變へた。

「あの野郎、そんなこと言つたてか」

女房たちや非番の鑛夫が彼方此方の軒から顔を出してゐた。

「あの生れそこなひ、ただ置かれねえ、乞食野郎」

菊松は昂奮して水涕が鼻の下一杯テカ／＼光つてゐることに氣がつかずに、そこいらをうろ／＼歩き廻つた。

要四郎は長屋から兩鶴を引ッ張り出して來た。

「みんな來い、ただで置かれねえ」

彼のあとに四、五人ついて行つた。菊松も少し腰の曲つた恰好でヒョコ／＼走つて行つた。

二人、三人と段々人数がふえた。その一團は吹雪の中を黒い一つのかたまりになつて飛んで行つ

た。あとから點々と蟻の行進のやうに人々が續いた。

鑛山町から遠く離れた一面の雪原の中にボツンと門衛の小舎は建つてゐた。眞向に吹きつける山嵐は、そのふもとの積雪を數丈の高さに濛々と捲き上げて、忽ち津浪のやうに小屋を襲つて來た。電柱が頭だけ出てゐた。小舎は吹き溜りで窓のところまで半分埋つてゐた。吹雪になるとその凄唸りで外に何事が起つても分らなかつた。

で虻川は小舎の中に居た。

と突然、誰かが外で叫んだ。

「野郎居た、やれツ、ぶちのめしてしまへ」

窓の外には數十人の鑛夫たちの怒りに炎えた顔があつた。

虻川はあわてくさつて机の下に投げ出してあるしんぱり棒を硝子戸に締め込んだ。

瞬間恐ろしい音がして硝子戸がヘシ折れた。硝子がバツと飛び散つた。

ジョンが猛然と哮え立てた。

虻川は兩鶴を振り上げてゐる誰かの姿をチラと見た。

彼は夢我夢中で疊が敷いてある部屋の窓から飛び出したが、其處は窓を無理にコヂ明けた瞬間、部屋一杯に雪のかたまりが落ちて来た程雪が深かった。

腰まで雪にうまつた。虻川は前後不覺でがむしやらに雪の中を這つて行つた。

死ぬやうな思ひだつた。全身が雪の中にすッほりうまつた。彼は湯呑の中に落ちた蠅のやうにもがいた。藻掻けば藻掻くほど深みへはまつた。

やつと息の出来るところまで這ひ出したときには虻川は死んだやうになつてゐた。

雪の中にぐつたりとなつて動かない彼のうへを吹雪が吹き捲つた。吹き溜りが段々彼のからだを見えなくした。

誰もそんなに虻川を探し廻らなかつた。

『こんたら小舎などぶつたふせ』

誰かが叫ぶと同時に、メリ／＼ガラ／＼といふ音が起つた。

羽目に風穴が出来た。

窓枠はボキ／＼折れた。

チャリン／＼と硝子が飛んだ。

ジョンが太い頸をあげて猛烈に哮え續けてゐた。虻川にはジョンを連れ出す餘裕がなかつた。太い

綱がピンと張つてゐた。その綱を足に繫いだ机は、ジョンの動く度に彼方此方に動いた。

鑛夫たちは重吉のクマが虻川に依つて殺されたことを知つてゐた。

雪の中から掘り出されたトロの枕木がジョンめがけて飛んだ。ジョンは右左に跳ね上つてあせつ

た。枕木を喰つてへたばつてはまた猛烈な勢ひで躍り上つた。足の高い机がひっくり返つた。

帖面が炭火のなかへ飛んで炎え出した。

広い雪原は吹雪で曇つたり晴れたりした。一吹き吹き過ぎると、豆粒のやうな門衛の小舎からちよ

ッぱり煙の上つてゐるのが見えた。小舎はつぶされた上に燃え出した。

ほんの數分の間出来事であつた。小舎をつぶした群衆はもどりはじめてゐた。がそれは遅れ馳せ

にやつて来た鑛夫たちを加へて更に人數を増してゐた。

群衆は雪原のなかを黒い線をひいて流れて行つた。

重太が坑内を出たのは薄暗くなつてからだつた。

事件の起つたのは一時間前だつた。群衆はちツほけな門衛の小舎を破壊しただけでは満足出来なかつた。一旦殺氣立ちはじめると十数年の永い間壓へに抑えて来た鑛夫たちの感情は、堰を切つた奔流のやうに物凄い勢ひであればはじめた。平坦な氷のもとには黒い底知れない潮が渦巻いてゐたのだ。燃えはじめた門衛の小舎から引き返した群衆は、最初はそのまゝ散るかと思はれた。がそれは次第に數を加へ勢ひを増して鑛山事務所めがけて押し寄せて行つた。役員たちはまだ仕事をしてゐた。彼等は事件を知つてゐたが、それは單なる蛇川に對する反感の爆發で、此方までのびて來やうとは豫期してゐなかつた。事實、事件の落着前にこの事件を理解したものは眞一郎以外には一人も居なかつた。

それと知ると役員たちは大あわてに何處かへ逃げ去つた。氣の立つた群衆にとつて、ところ／＼硝子のかけた、羽目板のきたなく剥け落ちた、古い學校のやうな事務所を破壊することは譯なかつた。忽ち古い建物は蜂の巢のやうに穴だらけになり戸棚や机は滅茶苦苦にぶツこわされた。

「鷲鳥をひねつてしまへ」
誰かが呼んだ。

滑らかな水面に波紋をつくるためには、石一つ投げれば充分であることを知つてゐたのは眞一郎だけだつた。

鑛夫たちは自分等の行動を理解しなかつたばかりでなく、誰が自分等の眞の敵であるかも知らなかつた。が群衆は期せずして南をうけた山のふもとの小高いところにある眞一郎の社宅に向つて波立ち渦巻いて行つた。

重太はのツし／＼と駄馬のやうな地響きを立てながら走つた。彼のあとにもさきにも坑夫たちが黙黙として走つてゐた。

最初の小屋と事務所は、非番で坑外に残つてゐた鑛夫たちに依つて破壊された。門衛の小舎から群衆が事務所の方に押寄せると同時に事件は坑内にも知れ渡つてゐた。事件がガン／＼大きくなつて來るに随つて誰も落着いて仕事をしてゐるものが無かつた。みんな道具を切羽や見張りに投げ出して駆け出した。坑内でも事件が起つた。日頃、坑夫たちの反感を買つてゐる退職軍人の見張役員太田は、坑夫たちを食ひ止めやうとして散々に殴られた。

一刻も早く駆けつけやうとして誰もものを言ふものが無かつた。數十人の足音だけがヒタ／＼と彼

等の耳についた。

吹雪の呻めきの中から警鐘が響いてゐた。それは烈しい吹雪に吹き捲くられて悲しげに絶えくりにふるへた。

『お前方、何處だつてよ』

誰かが叫んだ。

が誰も答へずにグン／＼百目石橋を渡つて社宅のある山ふもとに驀進した。橋を越えた瞬間だつた。

『おい、重太、待て、一緒に行く』

重太は振り返つた。

走つた勢ひで眞ッ赤な顔をした重吉が近づいた。彼はタガネを背負ひ辨當箱を提げてゐた。振り返つた瞬間に、彼等二人がお小枝との關係で度々氣まづい思ひをした共樂館の建物、向ふの河ッぶちに重太の目についた。が重吉の聲には何處かそれにこだわらない調子があつた。

『眞一郎の野郎、たゞき殺されたかも知れないで』

重太の鼻の頭は吹雪にたゞかれて唐辛子のやうに赤かつた。

二人は並んで走つた。

『お前の親父、何處けがしたてよ』

『なんも／＼、少し血出たばかりだ、俺家の親父もお前の親父も同じことをやつたなあ』

重吉の親父の重藏も去年事務所で負傷したのを重太は思ひ出した。所謂、老朽淘汰の網にかゝつたのも同時であつたし、その後の経路も共通してゐた。

が黙々として走つてゐる彼等二人の毛むくぢやらの強壯な胸板のなかを往來してゐるものはそれではなかつた。

へんな事からお互ひに張り合つてゐたお小枝は、崩雪の下敷になつた一人であつた。幸に彼女は眞ッ先に掘り出された。負傷もしてゐなかつた。が次の朝彼女は流産した。鑛山の女房たちの氣の強いものは、赤兒をひり出すと次の日は坑内に出て行つた。がお小枝はその後寢たなりで、からだが見るかけもなく青ぶくれがしてゐた。五ヶ月足らずで流産した胎兒が撰鑛の見張役員の若木の子であることは、重太と重吉の二人だけにはよく分つてゐた。それが重吉の氣持ちに餘計強く響いた。

「お前の我鬼死んで生れてよ、口惜しくないが？」

誰かがさうからかつて重吉は憂鬱に押し込まつてゐた。

でなくても口数の少い重吉はそれからといふもの啞のやうになつてしまつた。

もう眞一郎がやられた位に考へてゐる重吉たちには意外だつた。

群衆は社宅を取巻いて凝と静まり返つてゐた。

それは眞一郎が来ない以前には、重役たちが來山した場合その宿所に宛てる爲めの取つて置き物だつた。文化住宅式の白ペンキ塗で屋根は赤かつた。緑色のカーテンの下つた二階の窓には灯がついてゐた。

それが闇のなかにボカッと不安な明るみをたゞへてゐた。眞ッ暗いなかを吹き捲くる吹雪が群衆の怒りをけしかけるやうに呻いたり唸つたりした。が、黒い沼のやうに澱んだ群衆は沈黙を續けてゐた。頭の上では電線が今にも千切れさうに悲鳴を上げてゐた。

「鴛鳥どこ出せ」

ズツと前方で一つの聲が唸つた。

と無数の聲がそれに續いた。

「畜生、たゞきつぶせ」

「やれッ、こんたら家ぶつたふせ」

「鴛鳥どこひねつてしまへ」

「出せ、出さねばやつつけるぞ」

「……………」

丸太か何かで雨戸を殴りつける音がした。

我鳴り、罵詈、怒號が滅茶苦茶に飛んだ。羽目をどやしつける音が段々烈しくなつた。

先の方の一群がそれぞれの獲物で破壊を開始した。

突然、二階の灯のついた窓がガラッと開いた。

群衆の顔は一セイに上を向いた。

誰かが窓から半身乗り出した。

が眞一郎ではなかつた。それは意外にも、ころつきの小頭の一人だつた。

「誰も居ねえよ、谷野さんはな、今朝A市さ行つたよ、誰も居ねえとこで騒いだつてしやうがない、
歸れよ、騒いだら馬鹿見るぞ」

小頭は頸をのばして叫んだ。

眞一郎がその日鑛山に居なかつたことは事實だつた。そのことは後になつて鑛夫たちに知れた。が
群衆はそんなことには耳を貸さなかつた。

「餘計なことを言ふな」

「盗人野郎ぶち殺すぞ」

無数の聲は二階めがけて飛んだ。

メリ／＼メリツといふ音と一緒に玄關の戸が半分眞中からヘシ折れて向ふ側に倒れた。一人が素
早くなかに飛込んで行つた。

それがすぐ引き返して来て何か唸ると、數人の鑛夫が殺倒して行つた。

グワタグワタツといふ響きに續いて、罵りと怒號が建物のなかに起つた。建物を釘づけにしやうと
して事件の前にやつて來てゐた小頭もとの争鬭がはじまつたのだ。

雨戸がガバ／＼と剥ぎとられた。

障子が紙のやうに飛んだ。

數人の鑛夫は二階にも殺倒した。

二階の窓から、机、書棚、書物、着物が投げ飛ばされた。

布團が木ツ葉のやうにバラ／＼下にゐる鑛夫たちの頭に降つて來た。

雨戸、障子が剥ぎすてられると家の中は外からまる見えになつた。その中には自分の顔を見られる
のをきらつて、頬冠りをした鑛夫たちの殺氣立つて荒れ廻る様子が見えた。

同じ人間が何時までも中に居なかつた。一人が出て來ると一人が駆け上つて行つた。が中には何時
までも踏み止まつて刃廣を振り上げて柱をたゞき割らうとして居るものも居た。

突然、周囲は鼻を摘まれても分らない眞暗闇になつた。

誰かが電線を切斷したのだ。

群衆は夜の潮のやうに闇のそこで渦巻いた。

グワタツ／＼メリ／＼といふ恐ろしい物音はいよ／＼烈しくなつた。

太い電柱が數十人の力でドシン／＼と突きあたる度に建物はグラ／＼した。叫び、呻めき、怒號、譯の分らない唸り聲——もう滅茶苦茶だった。電線が群衆の狂氣じみた騒ぎと吹雪の呻めきのなかで金切聲をあけた。

その夜のうちに電話で二、三の町から狩り集めた八十名からの警官隊が入山した。警官隊は自動車で數回に到着した。そのなかには眞一郎も交つてゐたことが次の朝になつて分つた。最初の一隊は暴動の終らないうちに來た。勝紐をかけた警官隊は遠くから傍觀してゐたに過ぎなかつた。なまじ手を出せば火に油を注ぐ結果になることは分つてゐた。

翌朝、どこの鑛夫長屋も寝りに落ちてゐるうちに警官隊は鑛夫長屋を襲つた。百數十名の鑛夫が拉致された。數人の鑛夫と多數の警官の鈴なりになつた幾臺もの自動車も堆かい雪のなかを轉がりさうな恰好で走り去つた。

その中には「勞働會」の意識的な分子が吉藏を筆頭に一人残らず這入つてゐた。無論重吉と重太の二人もゐた。陰謀は極めて巧妙に仕組んであつた。が眞一郎が虻川ををとりにつかつた事は疑ふ餘地がなかつた。事實「勞働會」の連中は大抵その夜群衆の中に居た。彼等は無意識のうちに階級闘争を暴動の泥土の中に投げ込んだ。が彼等のうちに「騷擾罪」を構成する行動をとつたものは、重吉たちを除いては何人も居なかつた。眞一郎の奸計は反抗的な分子を根こそぎにした。

吉藏は花岡署に送致されるトラックの上で齒ぎしりして口惜しがつた。鑛夫大會を僅か二日遅らした結果は、まんまと眞一郎の陰謀に乗せられた。彼は全鑛山勞働者の置かれた客觀的主觀的狀態を正當に理解してゐなかつた。彼は鑛夫たちの鬱積した不平不満が、表面の平穩さのかけに、水門にあふれた水のやうにただ堰を切られるのを待つてゐたのだといふこと、従つてそれはその爲めの努力を拂ひさへすれば、容易に組織的争議に誘導し得られたのだといふことを、花岡署のフタ箱の中で始めて理解した。それに反して眞一郎はその目的のために水面に波紋をつくるのには、石を一つ投げさへすれば充分なのを知つてゐた。

が二年後監獄の門を出た吉藏達二、三人はその足で鑛山勞働運動の渦中に飛び込んで行つた。吉藏はその失敗の上に立ち上つた。母のかよは彼が監獄を出る一寸前に死んだ。

足の悪い母のかはりに妹の玉枝を背負つて、あらゆる困難と缺乏の中をのそくと然し執拗に歩いて行つた。

そのあとからはお小枝を失つた重吉が憂鬱な顔をして啞のやうに沈黙して尾いて來た。谷野眞一郎を思ひ出すとき、吉藏の胸は憤激のためにズキ／＼疼いた。彼は彼をして一敗地にまみれさせた眞一郎に對する復讐を、抑壓階級に對する執拗な闘争に振り向けた。

この鑛山地帯に於けるその後の争議の中で彼及び重吉の關係しないものは一つもなかつた。

—一九三〇・八・一二

昭和五年十一月十日印刷

暴動

昭和五年十一月十五日發行

定價五十錢

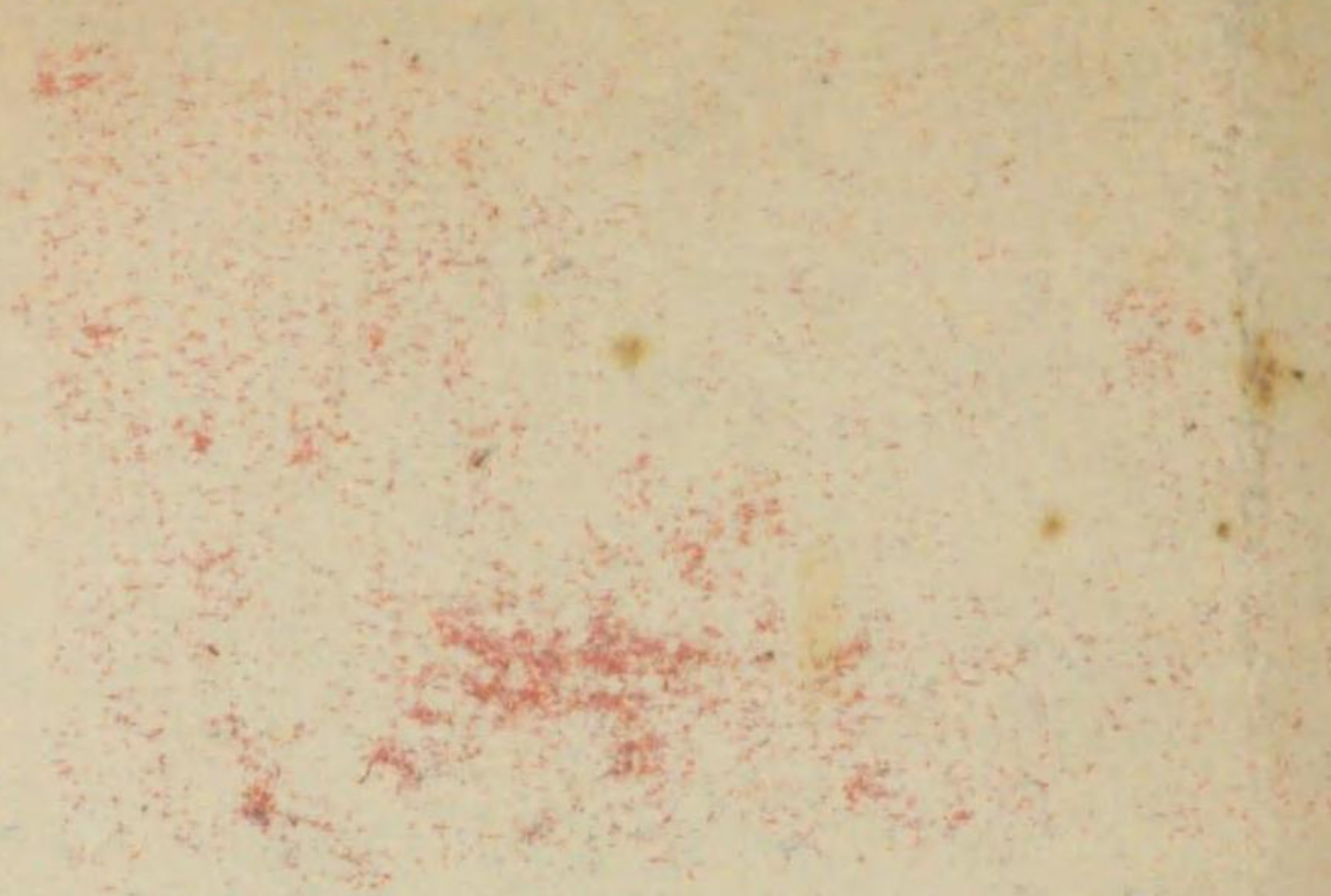
發行所		株式會社 日本評論社	
東京・丸ノ内・昭和ビル		振替東京一六 電話九ノ内(23) 四一三二 四一三三 四一三三	
著者	伊藤永之助	發行者	鈴木貞
印刷者	君島潔	印刷所	共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町一〇八		東京市小石川區久堅町一〇八	

新作家長編小説選集

支那から手を引け	武装せる市街	女工戦	異國の戦争	魚河岸	暴動	砂糖 近刊	陰謀	燃える森林 近刊	稚き闘士	或る時代の群像
前田河廣一郎	黒島傳治	今野賢三	小牧近江	金子洋文	伊藤永之助	細田民樹	細田源吉	平林たい子	葉山嘉樹	青野季吉

各册十五錢・本日評論社版・三四百六判

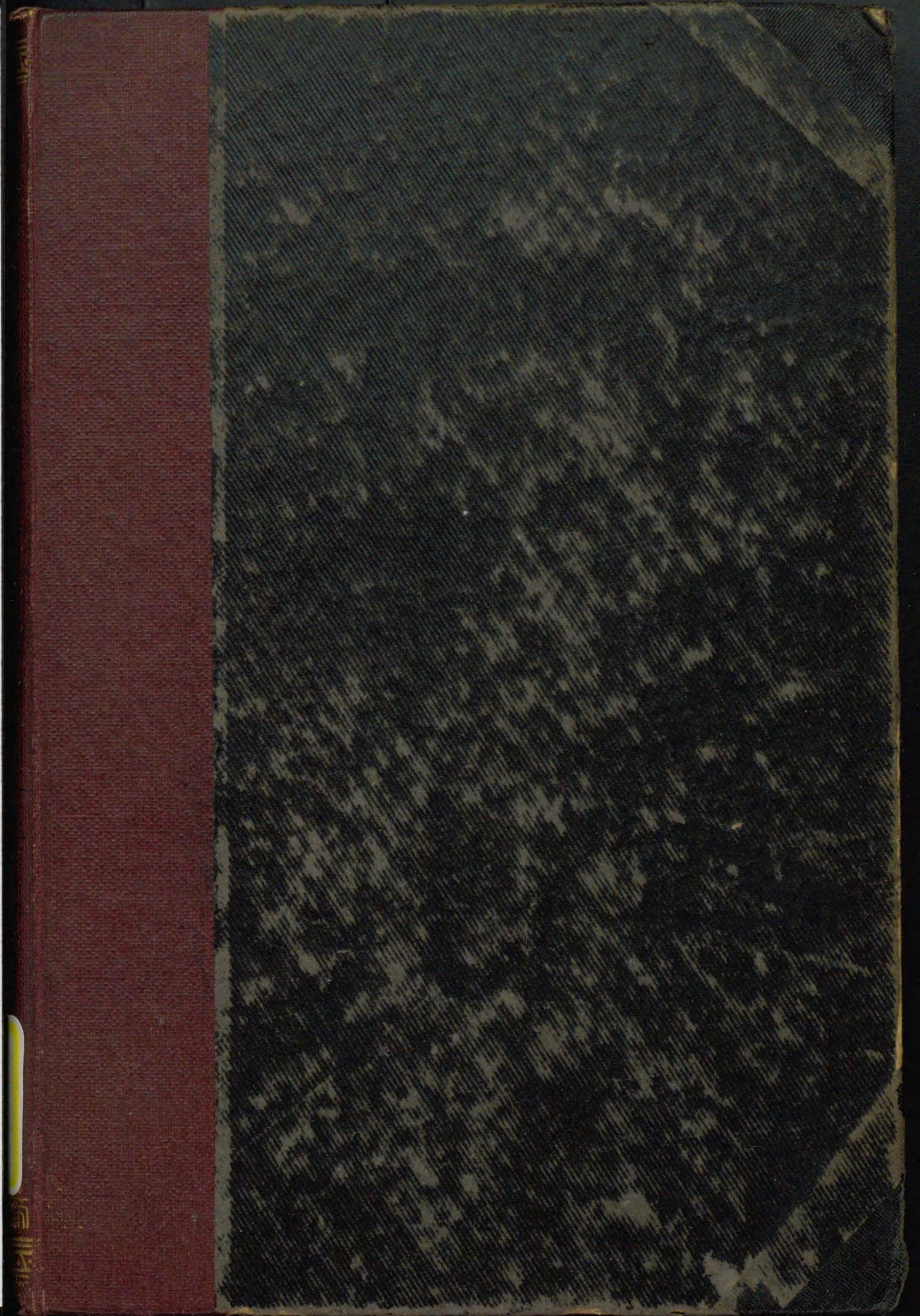
Handwritten text in a small box at the top left corner of the left page.



1850



613
13

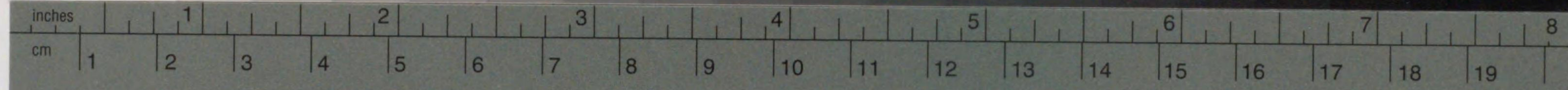


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

